

はじめに

元禄七年（一六九四）刊行の『唐錦』は、大高坂維佐子（一六六〇～九九）が書いた女性向けの教訓書である。維佐子によれば、中国では、八歳から一三歳までの「おさなご」は「閭巷の小学校」に入って、「洒掃應對の礼」を学び、「射御書数の芸」を習う。さらに一五歳から二〇歳までは「国都の大学校」に入學して、「綱領条目」を学び、修己治人の道を明らかにするという。こうした中国情報は朱子の『大学章句』序にもとづくもので、同時代の知識人が共有していた。事実、『唐錦』を書いた維佐子は、朱子学者大高坂芝山しざんの妻だった。面白いのは、「我朝もいにしへは、みやこより国々まで学校をまうけをき、人を教けると見えたり」と、古代日本の律令制時代の大学寮や国学を想起した後に、維佐子が次のように述べている点である。

今は学校こそなからめ、教ののりはけざやかなれば、いとみなきより年おひぬるにおよぶまで、つとめまなびてをこたらずば、などやその道をしらざらん。小学のかなめは敬にをるにあり、大学のかなめはしることをきはめ、意を誠にするにありとき、しが、をよそ学といふは、先覚のしりをこなふ所にのとりならふの義なり。

（『唐錦』巻九、古教訓）

一七世紀末の今現在、眼前には「学校」は存在しない。しかし、『小学』の居敬、『大学』の格物致知・誠意正心の「教ののり」は、はっきりしているの、幼い時から年老いるまで、学び続ければ、道を知る

ことができるのだという。この「などやその道をしらざらん」という「道」を求める意志を示した一句は、女性の言葉だけに重い響きがある。一八世紀になって、武士のための藩校が建てられるようになるが、女性が入学することはできなかった。というよりは、女性が「道」を志すことさえ、想像もできない時代であった。そのような時代、「学校」がなくても、「つとめまなびてをこらたずば」、道を知ることができるのだ、という維佐子の言葉は、女性のものであっただけに、一層、強い学びへの意欲が溢れている。

周知のように江戸時代は、数多くの学校が作られた時代である。維佐子が生きた一七世紀には身近には存在しなかった学校が、一八世紀になると、続々と建てられるようになる。藩校、私塾、手習所（寺子屋）などのさまざまな形態の学校が創建され、武士だけではなく、農民や町人たちも含めて、多くの者たちが学び始めた。このように多くの学校が建てられ、学ぶ者たちがいたことは、中国や朝鮮と比較する時、注目すべきである。科挙制度によって、学校が人材リクルートの装置となっていた中国や朝鮮と異なっており、日本には科挙はなかった。身分制社会の江戸時代には、学問を学んだとしても、立身出世の望みがなかったわけではなかったからである。にもかかわらず、学校が数多く存在したとすれば、そこには中国や朝鮮とは異なる、学問への要求や期待があるだろう。

江戸時代、学校が作られたということは、別の言葉でいえば、学校での教育が始まった時代だといえる。もちろん、維佐子が想起したように、古代以来、公家や僧侶のための学校はあったが、ごく限られた者たちの専有物だった。ところが、江戸時代には、一般の武士や農民・町人のための学校ができて、教育を受ける範囲は大きく拡大した。それまで、多くの人々は地域の共同体や家庭のなかで自ずから教育されてきたが、学校という機関のなかで一定期間、意図的な教育を受けるようになったのである。それにともなって、何のための学問か、何のための教育か、どのような方法で学習するのか、という問題が顕在化するこ

とになる。一体、江戸時代の人々は、このような問題にたいして、どのように答えたのだろうか。

今、彼らがそれらの問いにたいして、いかに答えたかを振り返ることは、学校が自明のものともみなされ、学校教育の目的など真正面から論じられることもない近代を問い直すことになるだろう。江戸時代は、「道」を求めた大高坂維佐子が「今は学校こそなからめ」と嘆いているように、学校は当たり前での存在ではなく、むしろ願望の対象だった。本書は、そうした学校が願望の対象であった近世から、学校教育が当然視されるようになった近代を照射することを目指している。

はじめに

序 章 江戸教育思想史序説…………… 3

一 近世と近代の連続・断絶…………… 3

二 「教育」と学校…………… 4

三 国家有用の英才「教育」…………… 9

四 子弟「教育」…………… 13

五 二つの教化…………… 16

六 学びの学問…………… 20

七 講釈と講談…………… 23

八 江戸教育思想史の歴史内在的課題…………… 27

第I編 学校構想と家訓

第一章 林家三代の学問・教育論……………49

一 林家塾の「教方」……………49

二 博覧強記の学問……………52

三 講釈と門生講会……………62

四 五科十等の制……………67

五 私塾から学校へ……………79

六 教育と教化の方向性……………82

第二章 江戸前期の学校構想——山鹿素行と熊沢蕃山との対比……………99

一 「物知り」批判……………99

二 「いがた」による庶民教化……………101

三 庶民教化の学校……………105

四 武士の教育機関としての学校……………110

五 「同志」との議論講習……………117

六 庶民教化と武士教育……………127

第三章 山鹿素行における士道論の展開……………136

一 士道論の研究史上の問題……………136

二 『甲陽軍鑑』『武教全書』の軍隊統制法	138
三 朱子『小学』と『武教小学』	141
四 武士道と職分	148
五 封建官僚の士道論	158

第四章

貝原益軒における学問と家業

一 学問と家業の並列	165
二 家業における勤労精神	168
三 学問の「楽」	172
四 不朽への意志	177

第Ⅱ編 儒学の学習法と教育・教化

第一章

太宰春台の学問と会読

一 徂徠の会読奨励	189
二 春台の社会観・人間観	192
三 学問の法則	197
四 会読の規則	204
五 「衆議」と決断	210

六 私的空間の学問……………214

第二章 一八世紀の文人社会と学校……………227

一 彦根藩の文人サロン……………227
二 会読の三つの原理……………230
三 藩校建設の是非論争……………233

第三章 細井平洲における教育と政治——「公論」と「他人」に注目して——……………245

一 「公論」形成の場……………245
二 「他人の交り」……………246
三 「相身互」い……………251
四 「家国の安危」の「相談」……………257
五 庶民教化と講釈……………261
六 「他人と他人との附合」の先駆……………265

第四章 寛政正学派の『中庸』注釈……………274

一 昌平坂学問所の学制改革と会読……………274
二 四書注釈の基本的立場……………277
三 注釈の方法……………282

四	注釈内容の特徴	290
五	注釈と会読	293

第Ⅲ編 国学と蘭学の学習法と教育・教化

第一章 一八世紀日本の新思潮——国学と蘭学の成立——

一	国学と蘭学の創業意識	303
二	「草木と同じく朽」ちない個人	305
三	同志との会読	312
四	二つの日本意識	320

第二章 江戸派国学と平田篤胤——村田春海・和泉真国論争をめぐる——

一	会読の場での論争	328
二	語釈の問題	332
三	「日本魂」の問題	340
四	平田篤胤のスタンス	346
五	理性と信仰	349

第三章 平田篤胤の講釈——『伊吹於呂志』を中心に——

一	講釈家篤胤	354
二	「無学な人」の「学者ぎらひ」	358
三	講釈（講談）による庶民教化	365
四	「皇国」への帰属意識	371
五	一君万民論の成立	376

第IV編 私塾と藩校

第一章 広瀬淡窓における学校と社会

一	淡窓の実力主義	391
二	風俗から隔離した学校	393
三	奪席会と競争	396
四	「官府」の介入事件	404
五	隔離された学校での自信	410

第二章 吉田松陰における読書と政治

一	横議横行の先駆者	419
二	松陰の会読体験	420
三	「語」の発見	426

四	朋党……………	431
五	読書から政治の場への転換……………	439

第三章

長州藩明倫館の藩校教育の展開……………

一	創設期と重建期との関連……………	446
二	創設期の風俗教化の目的……………	448
三	創建期の人材教育の目的……………	453
四	風俗教化と人材教育の間……………	458
五	重建期の人材教育への特化……………	461
六	会読における実力と平等……………	464
七	会読の政治討論の場への転換……………	468
八	藩校と私塾の対立図式の再考……………	471

第四章

加賀藩明倫堂の学制改革——会読に着目して——……………

一	人格修養の場としての会読……………	484
二	第一期の学制改革……………	485
三	第二期の学制改革……………	488
四	第三期の学制改革……………	496
五	平等化の工夫……………	502

六	試験制度の試行錯誤	506
七	学校と人材登用	512

第五章 明治前期の「学制」と会読 521

一	会読と寛容精神	521
二	「学制」の教育理念と輪講	523
三	郷学の輪講	527
四	郷学与学制小学校	532
五	輪講の廃止	537
六	会読・輪講廃止の理由	541

終章 549

初出一覧
あとがき
江戸教育史年表
索引

第二章 江戸前期の学校構想——山鹿素行と熊沢蕃山との対比——

一 「物知り」批判

近世前期、一七世紀の中ごろ、林家塾などの私塾は存在した⁽¹⁾が、公営の学校はほとんどなかった。藩校設立の早い例として、寛文六年（二六六六）に岡山藩の池田光政が創設した「仮学館」があるくらいである。このような時代状況のなかで、未だ見ぬ学校という教育機関を構想する者が現われた。林鶯峰と同時代の山鹿素行（二六二二―八五）と熊沢蕃山（二六一九―九二）はその代表者である。

周知のように、素行と蕃山は江戸前期のユニークな儒学者として知られ、これまでも分厚い研究史がある。⁽²⁾江戸儒学の第二世代といえる彼らは、武士の日常生活に儒学を取り入れ、みずからの生き方と政治のあり方を考えようとした。その思想的な模索のなかで、素行は朱子学を学べば学ぶほど、「実は世間と学問とは別の事に成」⁽³⁾（『配所残筆』、延宝三年、三三五頁）つてしまうことを痛切に自覚し、「学問」と「世間」の一致を求めて、政治的な志向性の強い「聖学」を確立した。また蕃山も、当代の人情事変にふさわしい経世済民の「心法」の学を説いた。

忘れてならないことは、こうした彼らの試みが、当時の時代状況のなかで孤立していたという事実である。江戸前期は、鶯峰が「不文の国」であると嘆いていたように、武士たちの間で儒学を学ぶ者が、ようやく現われる

ようになったばかりの頃だったからである。蕃山は当代の儒学の普及状況を次のように述べている。

宋明の書、周子・程子・朱子・王子などの註解發明の、日本に渡り、人の見候事は、わづかに五六十年ばかりなり。しかれども、市井の中にとゞまりて士の学とならず。十年このかた、武士の中にも、志ある人はしばし見え候間、後世には好人余多出来候べし。⁽⁴⁾
〔集義和書〕卷一、一三頁

ましてや、儒学をベースとした学校などは、「古は日本にも盛なりし学校の教へ、積奠の祭なども、中興せば珍しかるべく候」〔集義和書〕卷四、七九頁)と思われるほどだった。⁽⁵⁾このような時代状況のなかで、素行と蕃山は、当時の人々にとっては未知の学校という教育機関を構想していったのである。⁽⁶⁾本章で取りあげる理由は、彼らの構想した学校が、同世代の鷺峰の林家塾とは異なる目的と方法をもっていたからである。

そもそも、素行と蕃山は、林鷺峰とは異なる学問観を抱いていた。先に見たように、鷺峰にとって学問は博覧強記であることを必須とした。幕府・大名家に求められていた儒者の役割は、古今東西の書物を読み覚えた「物知り」だったからである。鷺峰が林家塾のなかで、そうした「物知り」儒者⇨学者の英才「教育」を目指したの⁽⁷⁾にたいして、素行と蕃山の二人は「物知り」学者を批判することで共通していた。素行によれば、当時の武士たちは子どもに、「学問をして心を正すことかと思へば、学問は気の尽くることなり、物読みにはなり給はじと云ひて、これを学ばしめ」〔山鹿随筆〕卷三、万治三年、全一一、三二〇頁)なかつたという。鷺峰が学者に要求した学問の勤勉・努力は、普通の武士には「気の尽くる」ものでしなかつたのである。

素行は、幼い時、林羅山に訓点を学んだことがあったが、のちには羅山を「その志す所大いに異なり。唯だ記誦の為にして、克己復礼を志すにあらず」〔山鹿随筆〕卷三、寛文元年、全一一、三四二頁)と述べて、朱子学から離れていった。⁽⁸⁾また、蕃山も、「今の儒学といふは、史となるの博学を習ふがごとし。(中略)大樹・諸侯・卿大夫・士・庶人の五等の人こそ道者にて候へ。儒者は一人の芸者なりとおもへ」〔集義和書〕卷一、二四頁)るとい

う現状を批判して、経世済民の「心学」を志向した。素行と蕃山はともに、「物知り」という専門学者のための特権的な学問ではなく、広く武士のための学問を求めたのである。

先に述べたように、鷲峰が無学な武士たちを「鼻缺くる猿」と軽蔑して、「一天地を別」にする林家塾の孤塁を守ろうとしたのたいして、素行や蕃山は当時の武士に相応しい学問としての儒学を求めて、学校を構想したといえる。本章では彼らの学校構想について、武士の日常生活と学校の関連に着目することによって明らかにしていきたい。

二 「いがた」による庶民教化

山鹿素行は寛文年間に、幼い頃から学んできた朱子学が日常生活から遊離してしまう隠逸的な学問であることを批判し、朱子の書から周公・孔子の書に回帰することによって、新たな学問＝「聖学」を確立した。素行は、『配所残筆』で述べているように、「世間」＝日常生活と「学問」との一致を求めたのである。主著『聖教要録』（寛文五年）や『山鹿語類』（寛文五年）に提示された「聖学」は、きわめて政治的志向性の強い思想で、とくに、その中心となる政治論は、「人君之治道、以_レ教化風俗為_レ本也」（『山鹿語類』巻一、全五、三三六頁）とあるように、武士と農工商の庶民の風俗教化を目指すものだった。まず、素行の学校構想を見る前に、その前提となる素行の風俗教化論を見ておこう。⁹⁾

最初に指摘せねばならないことは、素行の風俗教化論が朱子学の政治論の原理ともいえる『大学』の三綱領「明明徳」「新民」「止於至善」の一つである「新民」説への批判のうえに成り立っていた点である。朱子学の「新民」説は、民の個々の先天的な道德性を信頼して、民みずからがそれぞれの道德性を発現することを目指していた。そのため、現実的には困難かもしれないが、為政者に「人の家ごとに諭し、戸ごとに曉^{あか}さんと欲せざる

あとがき

本書の題名『江戸教育思想史研究』は、江戸時代の教育思想の思想史の方法からの研究という意味である。戦前の石川謙以来の汗牛充棟の日本教育思想史の研究史のなかで、本書のメリットがあるとすれば、思想史の方法から江戸初期から明治初期までの教育思想を通観した点にあるだろう。思想史の方法とは何かといえば、学問としての日本思想史学の創設者である村岡典嗣がドイツの文献学者アウグスト・ベックの言葉として引照した「認識されたものの認識」を指すことであるといえる。その意味で本書は、江戸時代の人々が教育・教化や学習について、どのように認識していたのかを明らかにした教育思想史だということになる。

こうした「認識されたものの認識」を目指す思想史の方法が日本教育史研究において重要な理由は、何より現代と過去との違いを明確にするからである。たとえば、序章で取りあげた「教育」という概念である。われわれは普段何気なく、「教育」という言葉を口にしていて、エデュケーションを「教育」と言い換えることにも、何の抵抗もない。しかし、江戸時代の人々は現代人と同じような意味内容で「教育」という言葉を使っていたのだろうか。もしそうでないとすれば、現代人の目から江戸時代の教育を論ずることの危うさが納得できるだろう。ひよっとすれば、現代人の先入見から江戸時代の人々の「教育」を読み込んでいくかもしれないからである。

本書はこの「教育」という概念のみならず、山鹿素行や太宰春台、細井平洲などの思想家個人についてはいうまでもなく、林鶯峰の林家塾や広瀬淡窓の咸宜園、吉田松陰の松下村塾などの私塾、あるいは長州藩明倫館・加賀藩明倫堂の藩校を取りあげた場合でも、この思想史の方法から見るという点で一貫している。

さらに思想史の方法による分析に加えて、本書のもう一つのメリットは学習方法に注目した点にある。これまでの日本教育史の分厚い研究蓄積のなかでも、江戸時代の学習方法について言及されてきた。とくに武田勘治の『近世日本学習方法の研究』（講談社、一九六九年）は、素読・講釈・会読の三つの学習方法を豊富な資料から概括し、「近世日本の学習方法といえば、もっぱら無理な注入法により、暗誦させる形のものだと考えられている」なかで、「会業（会読・輪講など）や独看・質問を主たる学習方法として、意欲的に活発な学習が行われていた」（自序、六頁）ことを論じている。しかし、武田の先駆的な研究は、『日本教育史資料』に収録されている藩校の学習方法に留まっていて、江戸時代の教育史全体を見通して、学習方法のもつ意義を考察するものではなかった。これに対して、本書では藩校や私塾という学校はもとよりのこと、学習方法に注目することによって、太宰春台や平田篤胤のような個人の思想理解についても新たな視角からの考察を行った。また思想家のみならず、学習方法を焦点にして、長州藩の明倫館と加賀藩の明倫堂の二つの藩校の歴史の変遷を追うことによって、藩校教育の実態を明らかにした。

ただ、素読・講釈・会読の学習方法のうち、会読については、すでに拙著『江戸の読書会』（平凡社選書、二〇二二年）で論じたことがあるので、本書は筆者の会読研究の増補版だといえる。さらに本書では、会読だけではなく、講釈にも大きなウェイトを置いた。序章で指摘したように会読は、江戸時代、英才「教育」にかかわる学習方法であったのたいして、講釈は「教育」のみならず、庶民「教化」の方法でも

あったからである。本書は会読とともに、細井平洲や平田篤胤の教化のための講釈に注目することによって、学校教育のみならず、これまでの教育史研究では社会教育ととらえられてきた分野にまで考察を広げることができたと思う。

ところで、筆者の教育思想研究のきっかけになったのは、あるテキストの一文であった。二〇〇五年六月、秋の学会報告の準備のため、日本思想大系の『本居宣長』所収の『玉勝間』を読んでいるとき、「会読」の語に行き当たった（『玉勝間』巻八、「こうさく、くわいどく、聞書」。頭注には、徂徠の『訳文筌蹄』の講釈批判と湯浅常山の『文会雜記』の「書ヲ会読スルト云事、中華ニテハ決テナシ」という一節が引用されていた。徂徠の講釈批判については周知のことであったが、恥ずかしいことに、会読については何も知らなかった。一体、どこで徂徠は「会読」を説いていたのだろうか。「会読」という言葉を見つけることは、案外、簡単であった。『弁道』『弁名』などの思想的な著作にはなかったが、灯台もと暗しとでもいうべきであろうか、これまで何度も読んできた徂徠学の入門書ともいえる『徂徠先生答問書』のなかに、「会読」という言葉があったのだ。この時、思い浮かんだのは、恩師源了圓先生の横井小楠研究であった。源先生によれば、幕末の開明的な思想家小楠は、熊本実学党の『近思録』の読書会において、徹底的に討論を重ねるなかで公論思想を成熟させていったという。とすれば、会読を媒介にして、小楠の公論思想は徂徠とつながるのではないか、そのような思いつきがひらめいた。それから筆者の会読研究、ひいては江戸教育思想の研究が始まった。

まず、武田勘治が使った『日本教育史資料』を読み始めた。この時ほど、勤務校が師範学校以来の伝統がある教員養成大学である幸せを感じたことはない。附属図書館には、教育史関係の資料や研究書が備わっていたのだ。資料探索の時間をかけることなく、すぐにテキストを読むことができた。そうして、

『玉勝間』の「会読」遭遇後、二か月間で仕上げたのが、会読に関する最初の拙稿「近世日本の公共空間——「会読」の場に注目して——」（『江戸後期の思想空間』所収）である。それ以後、これまでの私の研究スタイルに従って、九月締切の大学の紀要と一月締切の研究室の紀要の二つを中心に論文を積み重ねてきた。遅々とした歩みであったが、ようやく一書にするだけの分量がたまったというわけである。

そこで、本書所収の二つの拙稿「一八世紀日本の新思潮——国学と蘭学の成立——」「長州藩明倫館の藩校教育の展開」との御縁、また何より、多くの日本教育思想史の優れた書籍を刊行している思文閣出版に、図々しくも話を持ち込んだ。幸い、昨今の困難な出版事情のなか、快く出版を承諾していただいた。この間、本書を担当してくださった田中峰人さんからは、適切なアドバイスをいくつも頂戴した。とくに校正段階では、段落に分けて小見出しを付けるなどの、さまざまな工夫をしていただいた。心より感謝いたします。

二〇一六年九月

前田 勉

索引

*採録語句が章・節のタイトルに含まれる場合は該当頁をゴシック表記にし、
その章・節内からは採録を省略した。

【人名】

	う
	あ
会沢正志斎 11, 379, 424, 479	上杉治憲 245, 247, 251, 256, 269
青木周弼 481	上田作之丞 494~496, 499, 501, 502, 511, 512, 517
青地林宗 315	上野宏三郎 528
秋山玉山 7, 32, 224, 251, 270, 477	宇佐美瀧水 7, 10, 219, 220, 237, 452, 454, 476, 551
安積良斎 422, 469, 517	宇多天皇 57
浅見綱斎 227, 366	内山真龍 317
安部井帽山 277~279, 287, 290, 298, 299	海原徹 28, 470
天野信景 225	
雨森芳州 6, 7, 87, 95, 96	え
新井白蛾 485~487, 505, 516	江木鰐水 294, 546
新井白石 6, 85	江村北海 22, 24, 35, 522
	江森一郎 21, 498, 505
い	お
井伊直亮 237	汪琬 436
井伊直弼 435	王歩青 299
井伊直中 233, 234	歐陽脩 436, 444
生田萬 370, 385	大賀賢励 530, 545
池田光政 99, 110, 120, 126, 134, 135	大島賛川 504
石川謙 3, 9, 13, 14, 16, 17, 85, 86, 116, 237, 238, 275, 358, 447	大島桃年 26, 299, 489, 497~499, 501, 503~506, 508~513, 517
石田梅岩 25, 182, 357, 383	大菅承卿 239, 240, 244
和泉真国 328	大高坂維佐子 i ~ iii
佚斎樗山 381	大高坂芝山 i
伊藤仁斎 6, 29, 133, 190, 222, 224, 305, 306, 413	大田数馬盛一 492~494
伊藤東涯 413, 444	大田錦城 88
伊藤博文 540	大田南畝 308
稲葉正則 81, 82	大槻玄沢 307, 314
犬塚印南 274	大槻磐溪 517
井上頼寿 385	大原重徳 435
入江忠固 133, 474	岡千仞 295
	緒方洪庵 29, 351, 481

小川國治	463
小川為治	522
荻生茂博	276
荻生徂徠	6, 19, 24~26, 49~52, 62, 67, 71, 79, 85, 91, 93, 96, 189 , 197, 201, 206, 209, 214~217, 219~223, 225~229, 234, 238, 241, 244, 249, 254, 255, 263, 264, 268, 304, 358, 365, 429, 441, 442, 451, 454, 455, 457, 473, 474, 477, 495, 504
荻生北溪	86
奥村栄実	489, 496, 497, 499, 511
奥村尚寛	486, 487, 489
小倉尚斎	448, 452, 453, 458, 473, 474, 479
小倉尚藏	480
小瀬甫庵	50
小山田与清	351, 352
か	
海後宗臣	532
貝原益軒	6, 130, 133, 165 , 223, 268, 305, 306, 443, 543
海保青陵	35
片山兼山	298
桂島宣弘	370
桂広保	455
加藤千蔭	330, 351
仮名垣魯文	378
金子伝五郎	255
亀井南冥	32, 399, 414, 465, 478, 507
賀茂真淵	303, 317, 318, 330, 345, 350, 352
辛島塩井	10, 479
烏丸光広	89
河田正矩	18, 306, 324
川本幸民	537
顔子推	175
韓愈	90
き	
木戸孝允	550
木下菊潭	86

木下順庵	7, 489
木下松園	489~492, 494, 499, 501, 502
く	
丸鬼隆一	539
口羽徳祐	469
窪田次郎	534~537, 542, 546, 547
熊沢蕃山	99 , 189, 203, 345, 357, 481
久米邦武	441
倉地克直	119
栗田土満	317
け	
契沖	314
玄海	269
源信	184
こ	
孔安国	345
高坂弾正	163
孔子	199, 208, 209, 283
古賀精里	10, 274, 275, 278, 281~286, 290, 291, 293, 298, 479, 511, 517
古賀洞庵	277~279, 281~285, 287~ 290, 292~294, 429, 517, 520, 546
告子	207, 210
小埸重一	234~236, 243
後藤陽一	120
小幡景憲	149, 163
小町玉川	14
小松周吉	497, 502
小宮山昌秀	272
さ	
酒井忠勝	54, 120
坂井伯元	69, 71, 75, 78, 93
阪谷朗蘆	546
相良亨	136, 158
佐久間象山	422
桜田虎門	273
佐藤一斎	11, 12, 14, 297, 298, 437
佐藤信淵	35
沢村琴所	227

し

塩谷宕陰 11, 299, 479
 塩谷正義 405, 406, 408, 409, 416, 417
 式亭三馬 268
 司馬江漢 309, 324
 柴田鳩翁 25
 柴野栗山 274, 296, 415, 516
 渋井太室 296, 474
 朱子 i, 4, 21, 59, 101, 102, 104, 130,
 132, 141, 153, 161, 174, 202, 278, 285~
 289, 291, 293, 494
 神武天皇 57

す

杉田玄白 303, 308, 314, 315
 スコット, M. 538
 周布政之助 463, 468, 469, 480

せ

清田儋叟 25, 224
 施子美 161

そ

莊子 194, 222
 蘇頌 170, 183
 蘇東坡 345
 孫子 224

た

大道寺友山 14
 高杉晋作 469, 470
 高野蘭亭 232
 高橋敏 167
 高橋博巳 227, 231
 高橋文博 432
 高橋陽一 16
 滝鶴台 460, 463, 478, 479
 多紀元佶 11
 竹内洋 554
 武川幸順 317
 武田勘治 23
 武田信玄 137, 139

武谷祐之 396, 401
 太宰春台 189, 231, 232, 241, 264, 315,
 335, 338, 352, 365, 429, 478
 田中彰 470
 田中止邱 92
 田中世誠 233, 234, 236, 242

ち

長連弘 512
 陳選 162

つ

冢田大峯 9, 34, 325
 津軽信政 164
 辻本雅史 216, 379, 395

て

程頤(伊川) 91, 162, 399, 400, 414, 508
 手島堵庵 383

と

ドーア, R. P. 8, 20, 392
 常盤潭北 13
 独庵玄光 345
 徳川家康 50, 51, 89
 徳川綱吉 49, 85, 86, 216, 476
 徳川斉昭 387, 437
 徳川治貞 247
 徳川宗睦 245, 247
 徳川義直 49, 130
 徳川吉宗 26, 85, 108, 132, 216, 357, 474
 徳富蘇峰 424, 440
 利光鶴松 521
 豊田天功 424

な

中井竹山 14, 416
 永井尚庸 81, 82
 長井平吉 492, 494
 中内敏夫 21
 中江藤樹 53, 55, 89, 110, 119, 129, 132, 134
 中沢道二 25

中村一基	347
中村敬字	440, 523
中村篁溪	84
中村揚斎	279
中山昌礼	475, 519
中山黙斎	8, 32
那波魯堂	227
に	
西尾混山	242
西川如見	92, 185
西山拙斎	516
日蓮	364, 369, 383, 384
の	
荅戸善政	269
野村東臯	227~233, 239, 241, 242
は	
服部南郭	191, 220, 232, 313, 460
馬場文耕	384
浜田弥兵衛	371
早川正紀	417
林鷲峰	5, 6, 33, 49~68, 71~73, 75~97, 99~101, 106, 130, 132, 167, 184, 189, 238, 243, 276, 323, 382, 415, 473, 476, 551
林錦峯	95
林子平	383
林述斎	275
林晋軒	55
林説耕斎	73, 76, 94
林梅洞(春信)	5, 52, 55, 59, 66, 69, 71, 75~80, 91, 92, 94, 95
林鳳岡	32, 49, 51, 69, 75, 78~80, 85, 92~94, 131, 448, 452, 474, 476
林羅山	5, 49~51, 53, 57, 58, 63, 64, 73, 75~77, 84, 85, 89~91, 95, 97, 100, 275, 323
原念斎	226, 384
幡随院長兵衛	160
伴東山	238~240, 244

ひ	
尾藤二洲	10, 96, 274, 275, 297, 298
人見友元(竹洞)	69, 71, 75, 76, 78, 93
平賀源内	308, 321
平賀晋民	25, 326
平沢旭山	296
平田篤胤	29, 30, 86, 272, 311, 319, 328, 354 , 549
平田鉄胤	354, 386
平野金華	189, 207, 335
広瀬旭荘	406, 415, 416
広瀬淡窓	12, 29, 113, 351, 391 , 472, 481, 508, 530
広田照幸	3, 15
ふ	
福沢諭吉	223, 265~267, 443, 444, 522, 525, 545, 557
藤田省三	420, 550
藤田東湖	437
藤森弘庵	480
ほ	
北条瀬兵衛	468, 480
細井平洲	8, 27, 127, 245 , 325, 357, 413, 460, 478, 516, 555
細川重賢	7, 270
細川幽斎	89
堀景山	316, 363
本多利明	322
ま	
前田齐広	485, 488, 489, 492, 493, 496, 497, 499, 501, 515, 516
前田齐泰	485, 496, 515
前田治脩	485, 486
前野良沢	304, 308, 314
牧良助	492, 494
増島蘭園	277, 278, 283~285, 290
益田玄蕃	463
増穂残口	39, 272, 385
松崎観海	190

松下郡高 366
 松平定信 9, 34, 95
 松平信明 274
 間部詮勝 435
 丸山眞男 197

み

水野十郎左衛門 160
 三田村鳶魚 26
 箕作麟祥 553
 三宅尚斎 133, 279
 宮部鼎蔵 423
 三輪執斎 133, 135

む

村岡典嗣 319, 349, 375
 村田清風 446, 461
 村田春海 92, 317, **328**
 室鳩巢
 6, 53, 87, 90, 98, 216, 240, 279, 474

も

孟子 4, 199, 207~210, 221, 250, 494
 毛利重就 459
 毛利敬親 461
 毛利吉元 448, 451, 476
 本居大平 318, 351, 360, 361
 本居宣長 303, 309, 311, 316~318, 320,
 327, 328, 337, 340~342, 349~352, 354,
 355, 359~361, 363, 375, 377
 本木良永 314
 森有礼 541
 森重雄 3

や

山鹿興信 164
 山鹿素行 31, **99**, **136**, 167, 264, 357
 山鹿素水 422
 山県周南 211, 226, 441, 446, 448, 451,
 453~458, 460, 473, 474, 476, 478, 479
 山県太華 421, 427, 428, 431~434, 441,
 442, 444, 446, 461~465, 478, 479, 482
 山県長伯 226

山崎闇斎 49, 53, 63, 85, 89, 132, 190,
 279, 344, 366, 384
 山田長政 372
 山田亦介 469
 山本北山 517
 山本正身 21

ゆ

湯浅常山 191, 313

よ

雍正帝 444
 余英時 170
 横井小楠 123, 268, 437
 吉田松陰
 12, 21, 29, **419**, 446, 447, 469, 472, 555

ら

頼春水 294, 295

り

陸隴其 276, 281~283, 291, 293
 竜玉淵 239, 240, 244

わ

若林強斎 228
 渡辺兵太夫 509~512, 519

【事項】

あ	
『あすか川』	37
蛙鳴群	542
い	
「育英館学規」	10
「育英館学制議」	11, 479
『伊吹於呂志』	347, 348, 354
『気吹舎歌集』	311
『気吹舎筆叢』	311, 319
『以呂波歌』	398
『陰鷲録』	411
う	
『浮世風呂』	268
『迂言』	12, 113, 392~394, 401~404, 481
『うひ山ふみ』	311, 359
え	
『易経』	171, 276, 316, 503
越子塾	446
『淮南子』	330, 331, 336
『艶道通鑑』	272
お	
『往生要集』	184
嚶鳴館	254
『嚶鳴館遺稿』	478
『嚶鳴館遺草』	247, 248, 251~254, 259 ~263, 266, 271, 413
『嚶鳴館詩集』	251
嚶鳴社	468, 480
大江義塾	440
『翁問答』	89, 183
『奥村新井問答』	486
御座敷講釈	451
「小田県小学校規条」	532
小野郷学	529
『御触書天保集成』	295

か

『開化問答』	522
『会議弁』	223
『懷旧樓筆記』	393, 400, 401, 406~410, 414
『解体新書』	303, 308, 314
『貝原益軒家訓』	14, 36
『海防臆測』	469
「加賀藩士学事意見書」	23, 517
『家業道德論』	18, 306, 324
『楽訓』	176, 180
学習舎	528
学習堂	414
学制	521 , 552, 553
『学政考』	8, 475, 479, 519
『学政私考』	26, 497, 502, 503, 508
「学制につき被仰出書」	524, 525, 527, 542, 543, 552
『学制略説』	11, 479
『学政或問』	10
『学則』	190, 455
『鶴台遺稿』	460, 461, 478
『学問御吟味御仕方存念書』	415
『学問源流』	227
『学問捷徑』	25, 326
『学問所創置心得書』	297
『学問のすゝめ』	265, 522, 525
『学問之法』	522
『学寮了簡書』	24, 26, 49, 52, 62, 67, 72, 85, 93, 95, 96, 217, 473
『家訓』	165, 172, 174, 178, 179, 182
『学館考』	239
「学館功令」	453
『家道訓』	165, 168, 169, 171, 172, 180, 182, 306, 543
『歌道大意』	347
『仮名書古事記』	318
『鶯峰文集』	5, 51~56, 58~69, 71~74, 76, 77, 80~82, 92, 93, 323
『神路乃手引草』	385
『呵妄書』	347, 348
『唐錦』	i

「勸学文」 59
 咸宜園 12, 15, 29, 391~393, 396, 400,
 401, 404, 405, 407~418, 472, 530, 546
 『閑居筆録』 444
 『顔氏家訓』 175
 「管子牧民国字解」 262
 『漢書』 238, 317
 勸能学校 521, 541

き

『気海観瀾広義』 537
 『橋窓茶話』 6, 95, 96
 『己未文稿』 438
 奇兵隊 470~472, 544, 552
 「癸卯改正規約」 404, 405, 412
 『擬明史列伝』 436
 『鳩溪遺事』 308
 『九桂草堂隨筆』 416
 『旧事諮問録』 98, 442, 443
 「教育議」 540
 仰高門東舎(講釈)
 86, 98, 131, 216, 357, 450
 「拋遊館学則」 495
 『儀礼』 313, 314
 『近思録』 211, 429, 503

<

黒羽織党 512
 『訓蒙画解集』 309

け

『形影夜話』 314
 『芸苑譜』 25, 224
 経誼館(浜松藩) 299
 「経誼館揭示」 294, 299
 稽古館(彦根藩) 233
 『経済録』
 195, 198, 199, 212, 213, 218, 219
 『経山独庵叟護法集』 345
 『経世談』 273
 『經典余師』 29
 啓蒙所 534~537, 546
 月旦評 391

『葭園雑話』 207
 『兼山秘策』 98, 216, 474
 『言志後録』 12, 429
 『言志晚録』 430
 『言志録』 14, 430, 437

こ

『孝経』 146, 487
 『孝経外伝或問』 112~115
 「幸元子孫制詞条目」 166
 興讓館(米沢藩)
 8, 256, 257, 269, 270, 296, 516
 興讓堂 529~531, 538, 545
 『厚生新編』 315
 『皇朝史略』 528
 弘道館(佐賀藩) 441
 弘道館(彦根藩) 234
 「弘道館記」 437
 『弘道館述義』 437
 『講孟余話』
 12, 21, 425~427, 430~432, 443
 『講孟余話附録』 432, 433
 『甲陽軍艦』 137, 138, 149~151, 160, 163
 『古学先生文集』 190
 『古学要』 361
 『後漢書』 306, 413
 古義堂 29
 『五經大全』 63
 『国意考』 345
 『国語』 238
 『国史館日録』 52, 56, 57, 61, 69, 72~75,
 77~83, 92, 93, 96, 97
 『呉子』 444
 『古事記』 310, 317, 318
 『古事記伝』 311, 350
 『五常訓』 166
 「御製朋党論」 444
 『梧窓漫筆』 88
 『古道大意』
 347, 356, 371, 376, 377, 381, 385
 『諺草』 268
 『古文真宝前集』 58, 59
 『混同秘策』 35

さ

『在臆話記』	296
『在京日記』	316
『再来田舎一休』	20, 24, 381
『坐談隨筆』	383
『山子垂統』	298
『三条教則』	549
『三則教の捷徑』	378, 550
三奪法	391
『三略』	144, 146

し

『柴垣文章』	517
『塩尻』	225
『史記』	238, 256, 345
『詩経』	18, 254, 276, 414, 503
『詩経集伝』	63
『自娛集』	178, 184
『紫芝園規条』	204, 231, 312, 315
『紫芝園稿』	189, 190, 192, 204~206, 220, 241, 312
『紫芝園漫筆』	199, 208, 210, 214, 224
時習館(熊本藩)	7, 8, 32, 224, 269, 270, 477~479, 519
『時習館学規』	8
『自修篇』	14, 15, 37
『四書異同条弁』	280~282, 286, 287
『四書匯参』	299
『四書句読大全 大学』	102
『四書句読大全 論語』	104
『四書訓蒙輯疏』	277, 279, 287, 290, 299
『四書講義困勉録』	281
『四書集註』	494
『四書松陽講義』	282
『四書緒言』	281
『四書大全精言』	281
『四書知新日録』	298
『四書蒙引』	281
閑谷学校	135
『執斎先生雜著』	133
『耳底記』	89
『忍岡家塾規式』	67

『忍岡塾中規式』	67
『柴野栗山学事意見書』	297
『師範学校令』	541
『事務談』	7, 220, 237, 452, 454, 476, 551
『積業儀注』	451
『積業記録』	474
『周易本義』	63
『集義外書』	123, 130, 345
『集義義論問書』	124
『集義和書』	100, 111, 112, 114, 116~118, 120~122, 125~127
『重建明倫館記』	462, 479
『周南先生為学初問』	212, 452, 456, 477
『周南文集』	449, 451, 455, 457
『自由之理』	523
『十八史略』	528
『授業編』	22, 24, 35, 522, 547
『朱子語類』	153, 290~292, 427
『出定笑語』	385
『周礼』	276
『儒林評』	12
『春秋左氏伝』	183, 210, 238, 256, 276, 317
『春水遺響』	295
『春波樓筆記』	309
『囊園集』	227
『小学』	i, 141, 161, 162, 276, 400, 503
『小学教則』	526, 531
『小学集註』	162
松下村塾	12, 15, 29, 419, 420, 446~448, 472, 555
『小学校教員心得』	541
『小学校教則綱領』	526
『小語』	478
『升堂記』	473
昌平坂学問所(昌平黌)	9~11, 29, 49, 88, 96, 234, 238, 274, 277, 293~295, 297, 387, 413, 415, 441, 442, 470, 479, 481, 507, 515, 517, 519~521, 546, 551
『昌平志』	9, 33, 88, 216, 274, 275, 293, 476
『初学訓』	169, 171, 173, 179, 181
『書学知要』	171

『書経』 171, 276, 503
 『職原抄』 94
 『続日本後紀』 333
 書生寮 442
 『新館規則』 479
 『神国加魔祓』 39, 385
 『神国増穂草』 39
 『慎思録』 6, 173, 183, 184
 『新政談』 480
 「真宗皇帝勸学文」 58
 『信長記』 50
 『真道考』 340
 新民序 528
 『神武権衡録』 366, 384
 『新論』 379

す

『随意録』 325
 『鈴屋集』 359
 『鈴屋文集』 309
 『駿台雑話』 89, 90

せ

『西域物語』 322
 『正学指掌』 297
 『聖学問答』 93, 193~196, 199, 201, 202, 207~211, 218, 224
 『聖学俚譚』 495
 『齐家論』 25, 383
 『静寄軒集』 298
 『正享問答』 135
 『聖教要録』 101, 104, 106, 109, 130, 137, 148
 『靖献遺言』 470
 『靖献遺言講義』 366
 誠之館(福山藩) 546
 『政談』 91, 191, 212, 215~217, 218, 234, 238, 244, 249, 264, 454, 504
 『聖堂略志』 295
 『西風淚露』 76
 『西洋品行論』 440
 『精里全書』 282, 479
 『拙斎遺文鈔』 516

『説文解字』 13
 『戦国策』 420
 『先哲叢談』 88, 97, 226, 384, 478

そ

『莊子』 94, 198, 317, 345
 『増訂四書大全』 281
 『草茅危言』 14, 416
 『息游先生初年倭文』 110
 『徂徠集』 220, 476
 『徂徠先生答問書』 91, 190, 191, 223, 228, 229, 236, 456

た

『大学』 i, 101, 113, 451, 452, 503
 『大学考』 132
 『大学小解』 113
 『大学章句』 i, 53, 132, 276, 481
 『大学章句纂釈』 276
 『大学章句諸説弁誤』 276, 277
 『大学問答』 289, 293
 『大学養老篇』 133, 474
 『大学或問』 111, 114, 116, 123, 125, 126
 『大疑録』 175, 184, 223
 『太閤記』 50
 「第三大学区巡視報告」 539
 『大唐開元礼』 475
 『大日本史』 345
 『太平記』 420
 『太平策』 19, 231, 456
 「大峯意見書」 9
 『謫居童問』 131
 奪席会 393, 396, 414
 『たはれ草』 87
 『玉勝間』 303, 317, 319
 『玉くしげ』 375
 『玉襖』(『玉たすき』) 329, 377, 386
 『靈の真柱』 357, 374

ち

『竹洞人見先生後集』 76
 『治平旧事』 31
 『中庸』 118, 162, 274, 503

『中庸小解』	118
『中庸章句』	19, 59, 278, 284, 286, 290, 291
『中庸章句纂釈』	277, 279
『中庸章句諸説参弁』	277, 283, 290
『中庸章句諸説弁誤』	277~280, 282, 285, 286, 289~291, 297
『中庸問答』	277, 279, 281, 283, 284, 287, 288, 291~294
『中庸欄外書』	298
『中庸或問』	278, 288
『町人囊』	92, 186
て	
『丁巳幽室文稿』	434
適塾	29, 351, 481
『伝習録』	291
と	
『侗庵初集』	520
『燈火記聞』	391
『東湖封事』	438
同志会	315
『童子問』	6
藤樹書院	129, 134
『当世武野俗談』	384
『冬読書余』	96
『童蒙先習』	50
『土芥寇讎記』	164
『徳川禁令考』	96
な	
『直毘靈』	320, 321, 337, 340, 352, 359
『長門国明倫館記』	449
長沼郷学校	529
『南柯一夢』	396, 398, 401
『南郭集』	220
に	
日新館(会津藩)	299
『日本外史』	470, 528
『日本教育史資料』	28
『日本書紀』	351

『日本政記』	528
『入学生学的』	231, 469, 484
『入学生礼節条目』	503, 504
ぬ	
『沼山対話』	437
の	
延方学校	272
『祝詞考』	352
は	
『配所残筆』	99, 130
『葉隠』	136, 164
『杷山遺稿』	469
『花園会約』	119, 120, 122, 134
林家塾	5, 7, 9, 27, 29, 33, 34, 49, 60, 62, 64, 67, 74, 80, 82~86, 96, 99, 100, 129, 274, 296, 454, 473, 476, 551, 553
ひ	
『蜚英館学規』	399, 507
『彦根藩士学事意見書』	237
ふ	
『風来六部集』	322
『武教小学』	132, 137, 138, 141, 148, 149, 152, 153, 159, 160
『武教全書』	137, 138, 142, 151, 155, 159, 160
『武教本論』	163
『父兄訓』	383
『不尽言』	363
『武道初心集』	14
『文苑玉露』	346
『文会雑記』	23, 191, 192, 224, 313
『文訓』	174, 180
文明館(松江藩)	477
『文明教育論』	557
へ	
『兵学寮掟書条々』	420
『平洲談話』	255

『弁道』 6, 209, 451, 477
『弁道書』 193, 214, 338, 352
『弁名』 190, 197, 217, 226, 455

ほ

芳宜園 351
『逢原記聞』 270, 478, 516
『鳳岡全集』 79, 94
「朋党論」 436
『法華経』 17
『戊午幽室文稿』 428, 440
「細井甚三郎内考」 246, 253, 258
『細井先生講釈開書』 249, 252～254
『本朝通鑑』 5, 51, 57, 60, 61, 64, 67～70, 73, 80～82, 84, 85, 90, 92, 93, 95～97, 476

ま

『万葉集』 317, 351

み

『民家童蒙解』 13, 552

め

明教館(和歌山藩) 519
『名臣言行録後集』 170
明道館(秋田藩) 475, 517
『明道書』 328～330, 340, 346, 351
『明良洪範』 54, 55
明倫館(長州藩) 28, 133, 226, 269, 270, 418, 420, 421, 423, 441, 446, 513
明倫堂(尾張藩) 245, 263, 271, 516
明倫堂(加賀藩) 28, 244, 479, 484, 516
「明倫堂御規則」 497

も

『孟子』 4, 12, 65, 105, 157, 193, 194, 250, 256, 425～427, 430, 449, 503
『孟子集注』 13, 21
『黙識録』 133
『本居宣長』 319
門生講会 62, 75, 77, 83, 85, 86

や

『夜雨寮筆記』 400, 405, 416
『約言』 411
『約言或問』 412
『訳文筌蹄』 229
『山鹿語類』 101～109, 131, 132, 137, 145, 148, 149, 151～160, 162, 163
『山鹿随筆』 100, 103, 105, 131
『大和小学』 89
『大和俗訓』 169, 173, 175～178, 180, 306

よ

『養心談』 35
「米沢学校相談書」 8, 257
『世の手本』 296

ら

『礼記』 18, 52, 102, 109, 133, 203, 313, 451, 474, 482, 504
『楽翁公遺書』 34
『楽訓』 443
「楽群亭会業約」 230, 231, 239
『羅山文集』 51, 57
『蘭学階梯』 307, 309, 324
『蘭学事始』 304, 307, 308, 314

り

『六橋記聞』 414
『六韜』 143～146
『六論衍義』 37
『令義解』 328～330, 332, 340, 342
「林氏剃髮受位弁」 55

る

『類聚国史』 333

れ

『列仙全伝』 53

ろ

『老子』 198
『老子形気』 516

『論語』 17, 20, 22, 58, 104, 122, 147, 182,
203, 206, 233, 276, 305, 346, 358, 503
『論語古義』 305
『論語小解』 117, 124

わ

『和俗童子訓』 133, 170, 173, 178
『倭読要領』 192, 200~203